孫育ては樂しい！

山下　修（教育・昭和 57 年卒）

大学を卒業して早 40 年になろうとしている。退職してみれば、なんと時の経つことの早かったことか。還暦も過ぎ、あと 1 年もたてば年金をもらえる身分になるとは我ながら信じ難い。歳はこれからも重ねていくが、気持ちだけは若くいたいと思っている。

今は、晴耕雨読とまではいかないが、主夫？をしながら時間に追われないゆったりした生活を送っている。それも悪くない。自分の性にも合っている。色々と発見もある。そして、何より孫の面倒を見るのが楽しい。自分の子どもが親に面倒を見てもらったように、今度は自分の役回りかなと思い、認知症予防を兼ねて幼稚園に通う孫の面倒を見ている。

孫とこれまで遊ぶ中で面白かったエピソードを幾つか紹介したい。

1　私のズボンの膝が破れていたのを見た妻が、孫に「縫ってあげて」と言うと、なんと孫はオロナイン軟膏を持って来て膝に塗りだしたのである。「縫って」と「塗って」の勘違い、これにはみんなで大笑いした。本人はキョトンとしていたが・・・。

2　娘夫婦や私たち夫婦がたまに夫婦げんかをしていると、大きな声で「わぁ～～、静かにしてよ。」と、大きな声を上げて仲裁に入ってくる。犬も食わない夫婦喧嘩、子どももやはり嫌いのようだ。夫婦円満でないといけないと自戒する。

3　２月に、孫にとって大好きな曾祖母が他界した。幼稚園から帰ると、真っ先に隣の家に住むひいばぁばの所に挨拶に行くほど慕っていた。その後毎日とまではいかないが一緒にお経をあげていたら、いつも間にやらだいたい覚えてしまった。「門前の小僧習わぬ経を読む」の例え通りになった。環境が及ぼす影響を実感。

4　新型コロナウイルスの感染が拡大しだした頃、孫の両親も時々在宅勤務をするようになった。その頃孫に、「今日は何をするの？」と聞くと、「今日は在宅するの。」とまじめな顔で言いながら、使わなくなったノートパソコンを持って来てスイッチを入れ、画面が立ち上がるとキーボードを押していた。見事な仕事ぶりに感心！

このような例は枚挙にいとまがない。孫と関わりながら、現役の時、子ども観の基盤にしていた言葉を思い出した。１生きる力や伸びる力は子ども自身がもっている　２子育てに手抜きはできない　３根底に温かな愛情が必要である　４個人差を認めなければならない（東原岩男著『学び合い　支え合い』の中の「サカキの小枝のたくましさ」より）、さらに、5 子どもを能動的な学習者として捉える（平野朝久著『はじめに子どもありき』より）。

これからも孫の成長を楽しみに過ごしていきたい。今日はどんなことがあるかな？